

# 上幌内モイ遺跡が語る 厚真の歴史

町教育委員会では、厚幌ダム建設に伴って、遺跡発掘調査を平成14年度から行なっています。

昨年度から、ダムの堰水地区内（ダムに水をためるところ）にあたる上幌内モイ遺跡の発掘調査に入っています。

調査によると、約1万4千年前の旧石器時代から厚真にはヒトが住み始めていたことがわかり、厚真の豊かな自然や地の利にはぐくまれた、1万年以上の歴史があったことを出土品などからうかがい知ることができます。出土品は、先人たちが残した文化財という土の中からの大切な手紙です。

上幌内モイ遺跡は、いく層にも積み重なるように各時代の出土品が発見されています。

人々が旧石器時代から各時代にこの地に生活し、残した遺跡が物語る厚真の歴史を探訪してみましよう。

## 昔から住みよかったので 遺跡が多い厚真

**厚** 真町には、現在、98カ所もの遺跡が見つかっています。ほとんどは、湿地を望む見晴らしのよい高台にあります。16年度には、6カ所の遺跡が新たに発見されていることから、まだまだ知られていないたくさん

の遺跡が土の中に埋もれているものと思われま。また、厚真の特徴として、高丘や幌内地区などの山あいにまで、遺跡が見つかっています。

ダムの工事が始まる前に、上幌内地区の遺跡の有無を調査したところ、11カ所の遺跡が新たに確認され、オニキシベ川やシヨロマ川との合流点に大きな遺跡がありました。

16年度から発掘調査を行なっている「上幌内モイ遺跡」の『モイ』とは、アイヌ語で川が大きく蛇行し、水の流れが緩やかなところなどの地形についた名前です。このような淵には、川魚が集まったり、秋にはサケが遡上する時のたまり場にもなり、よい漁場となっていました。

北海道で最も古いヒトの生活の跡は、氷河時代の旧石器時代と呼ばれる約2万年前ごろからで、千歳市や十勝の上土幌町で見つかっています。

学校では、縄文時代、弥生時代、

古墳時代…と習いますが、北海道では、冷涼な気候と人々の暮らしを支えることができる豊かな自然があったことから、本州では、弥生時代のころ北海道は続縄文時代、奈良・平安時代のころは擦文時代など本州と異なった生活文化が続きます。

### 旧石器時代

#### 1万4千年前

**旧** 石器時代とは、縄文時代よりはるか昔、また土器がなく石器を使っていた時代です。16年度の発掘調査で上幌内モイ遺跡で発見された出土品は、今から約1万4千年

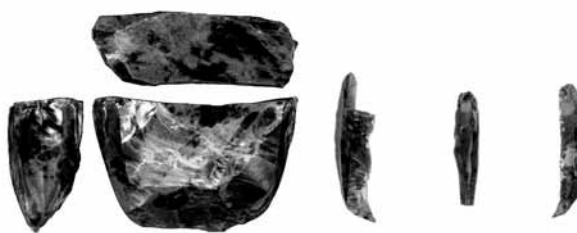
前の後期旧石器時代のもので。この時代は、氷河期と呼ばれる寒い時代で、海面が今より100mほど低く、北海道の北方はサハリンと陸続きとなり、マンモスやオオツノジカなど大型の動物が移動してきました。これを追って、北海道にやってきたヒトたちが、たくさん

の遺跡を残しています。まさに、旧石器時代のヒトたちは、食料となる動物を追いかけてきたハンターだったのです！

厚真で旧石器時代の遺跡が発見されたのは、上幌内モイ遺跡が初めてです。石器が発見された場所は、見晴らしのよい小高い丘の先端です。これまで厚真では、縄文時代のはじめのころの6千2百年前の遺跡が一



▲旧石器時代の遺物が多数出土しました。



◀1万4千年前のカミソリの刃のようなもの(細石刃、写真右)をはぎとる母材(黒曜石、写真左)。



▲復元された特徴的な縄文土器

**縄** 文時代では、主に高台に竪穴住居を作って暮らしていたようです。そして、シカを捕るための落とし穴を掘り、山の恵みを大いに授かっていたようです。

### 縄文時代

#### 6千2百年前

遺跡から見つかる縄目文様のついた縄文土器や黒曜石の石器、石のペンダントなどの観察から、6千年以上も前から、いくつもの山を越えて富良野や道南地域との交流が考えられ、北海道のへそから太平洋に抜けるルートが、この厚真にあつたことが分かりました。夕張山地まで遡る厚真川が大きな役割を果たしていたのでしよう。



▲縄文時代に作られた石のペンダント(飾玉)



▲ノコギリの歯の形をした矢じり(鋸歯状石鏃)



▲楕円の形をした竪穴住居跡で4本ピンホールが立っているところが主柱が立っていたところ。中央に炉があった。



◀シカを獲るワナ(トビット)。中央の穴に人を立て、シカが落ちたときにささる仕組み。

## 擦文(さつもん)時代

1千年前

**京**の都で貴族たちが暮らしていた平安時代。

北海道と東北は、まだ日本という国の中に入っていない状態でした。このころ北海道で暮らした人々は日本の文化から多くの技術を学びとりながら、独自の文化である擦文文化を築き上げてきました。

上幌内モイ遺跡では、祭り場跡からイナキビを練りこんだ団子が見つけられました。団子は直径2センチ前後で、30センチ四方の範囲内に約50個発見されました。炭化した状態で、祭りや儀式の際に、お供えものとして、たき火にくべられたと考えられています。擦文時代のイナキビ団子が発掘されたのは道内で初めてです。

これまで厚真町周辺では、擦文文化の遺跡調査例が少なかったのですが、今回、上幌内モイ遺跡からは、この時代の土器や鉄の道具がたくさん出てきました。



▲1000年前に擦文人が掘ったまるい形をした溝(円形周溝遺構)。お祭りが行なわれたと推測されています。



▲色の違って見える約50個の炭化したイナキビ団子。お祭りの儀式の際に、お供えものとして火にくべられたものと推測されています。

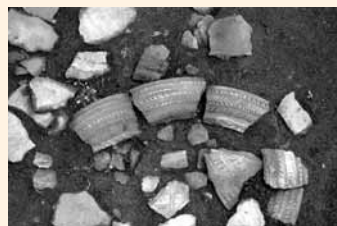
擦文時代のイナキビ団子が発掘されたのは道内初。



▲現在の青森県五所川原市にあった登り窯(かま)で作られた須恵器(すえき)。シカやクマの毛皮と物々交換したと思われる。

▶擦文時代の土器は、形を整えるために木のヘラを使って土器の表面をナデていました。そのため土器をよく見ると木目の跡がついていることがわかります。

また、大きく開いた口の形は、当時東北で作られ始めたと考えられる鉄の鍋の形を真似したのではないかという説もあります。(写真上が出土した時の様子、下は復元した擦文土器)



## 上幌内モイ遺跡が語る厚真の歴史

500年前の

アイヌの人々の生活

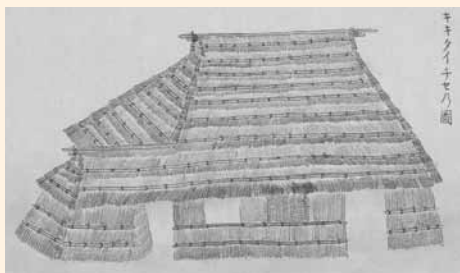
500年前のアイヌの人々は自然をうやまい、自然とともに生きる狩人・漁師でした。その生活スタイルがあまりに自然にやさしいため、その生活の跡が遺跡でみつかるとはめったにありません。

しかし、上幌内モイ遺跡では、シカを解体した跡や、家の跡、神聖な家の囲炉裏(いろり)の灰を祭った儀礼の場所、ムラ人を埋葬したお墓が、当時使われた数々の道具とともに見つかっています。

これらの出土品は、これまで謎とされてきた擦文時代からアイヌ時代への移り変わりの様子を解明できるかもしれない重要なものです。



江戸時代のころにアイヌの人たちが住んでいた家は、柱を立て、屋根を載せ、壁をつくり、真ん中に囲炉裏(いろり)がある“チセ”と呼ばれる建物でした。遺跡では屋根や壁は残らず、柱が立っていた跡と囲炉裏の跡だけが家の痕跡として残ります。しかし残された痕跡から、どうやら江戸時代の絵や伝承されている“チセ”の配置と同じく東西に長い形をしていたようです。



「蝦夷嶋図説」に描かれた19世紀のチセ

▶赤漆(あかうるし)が塗られたお椀(わん)



▶鉄製の鍋(内耳鉄鍋)



▲男性のお墓から見つかった刀(エムシ)

## モイ遺跡に眠る 先人たちの霊を供養

**ア** イヌ文化期とみられる約500年の前の墓2基から2体の人骨が見つかり、6月12日、上幌内モイ遺跡でアイヌ文化の伝統にのっとりた慰霊祭が行なわれました。

(社)北海道ウタリ協会胆振地区支部連合会の協力を得て、管内各支部の会員の皆さんを招き、町教育委員会などによる厚真町イチャルパ実行委員会が主催して、カムイノミとイチャルパの儀式が行なわれ、神々や先人に祈りをささげました。



▲カムイノミ  
神々の護(まも)りに感謝し、平和な暮らしを願う儀式。

◀イチャルパ  
フチ(おばあさん)が中心となり、イナウ(ごへい)と供物をささげ、先祖の霊を祈る儀式。



## 歴史を紐解く 発掘作業のようす

**上** 幌内モイ遺跡の発掘調査では、5月から10月まで、調査

員と作業員約50人が、時には急な斜面で、また灼熱(しゅくねつ)の太陽の日射が照りつける中を作業しています。普段は、移植ゴテで掘り進め、時にはハケや竹べらを持つての根気のいる細かい作業です。

出土品は、11月から3月にかけて約20人の調査員と作業員が土器の復元、写真や図面などを作成し発掘調査報告書を作成します。



▲日射しが照りつける中、急斜面で作業する作業員の皆さん。

◀歴史を伝える大切な出土物を移植ゴテやハケなどで丁寧にほり進め、記録します。



### 厚真の遺跡の発掘調査から

#### 厚真町教育委員会学芸員 乾(いぬい) 哲也

厚幌ダム建設にかかわる発掘調査が縁で、この厚真に来て4年が経ちます。山間部での発掘調査は道内でもほとんどされていないので、正直「こんな山奥で!？」と思いました。しかし、毎年、毎年、驚きの連続です。

厚真の歴史が約14,000年前の氷河期にあたる旧石器時代までさかのぼることが分かりました。私自身も、クリーム色の粘土層からの石器の発掘は初めてのことで、本当に見つかるとは驚きです!

縄文時代の遺跡ではシカを捕るための落とし穴が、他の地域より、たくさん見つかります。大昔よりシカがたくさんいて、厚真の縄文人はその恵みに助けられていたのでしょうか。そんな、想像をするだけでも楽しいものです。遺跡からは縄文土器や黒曜石の石器のほかに、全国でも珍しい形をしたキレイな石製ペンダントの発見、さらには、富良野盆地との交流が縄文土器の粘土に含まれる石英というキラキラ光る鉱物から分かりました。このほかに、4,000年前に起こった巨大地震の跡も見つかり、ヒトが残した歴史だけではなく、地球・大地の歴史も分かりました。今後の防災対策に役立つのではないのでしょうか。

約1,000年前の擦文時代、日本の歴史では、摂関政治の藤原道長などの貴族の時代です。そのころの上幌内モイ遺跡からは、朝鮮半島産と思われる銅のお鉢(わん)や青森県産の須恵器(すえき)と呼ばれる壺(つぼ)や刀、日高山脈を越えた道東の置戸産の黒曜石、炭になった「イナキビ団子」などが見つっています。これらの貴重な交易品はすべてたき火で焼かれた状態でした。普通なら宝物を燃やしたりはしないですよ。おそ

らく、もっと大切なことがあったのでしょうか。それは、「祈り」だったのではないのでしょうか。どんな思いで何に、祈り=儀礼をしていたのでしょうか。このようなたき火跡を中心とする“祈りの場”は北海道でも初めてのことです。他に、幅1m、深さ30cm前後の溝を円形に掘って内側で何かをしていた“円形周溝遺構”も見つかりました。これも、儀礼にかかわるものと思われます。次のアイヌ文化では、“チャシ”と呼ばれる壕(ごう)を切った砦跡(とりであと)がたくさん築かれます。古い時期のものは小規模で神聖な場所とされ、時代が新しくなると戦争に使われていたようです。上幌内モイ遺跡で見つかったこの遺構も、チャシのルーツかもしれません。

約500年前のアイヌ文化期では、“チセ”と呼ばれる家の跡や倉庫跡、お墓が見つっています。細かく地層を調査したところ、古い時期では川の上流を意識した家の作りで、新しい時期は、太陽の動きに沿った東西方向を意識して家やお墓を作っていたようです。出土品としては、本州との交易で手に入れた数々の鉄製品や漆碗(わん)などが見つっています。視しは飛びますが、約150年前に厚真を訪れた幕末の探検家“松浦武四郎”が厚真のアイヌは畑を耕し、宝物をたくさん持ち、非常に裕福であったことに驚いています。遺跡の調査でも、予想以上に鉄製品などが見つっていますから、盛んに交易を行っていたことがわかります。厚真は昔から、自然の恵み、地の利を生かした交易などで、栄えていたことが分かりました。

このように、厚真にはたくさんの埋もれている人の歴史があります。遺跡の発掘で、その土地に、周囲の自然環境とともに暮らしてきた人たちのことがいろいろと分かってきます。単純に“過去”を調べるようにも思えますが、そこから、視点を変えた厚真町のこれからの可能性を見出すこともできるのではないのでしょうか。これからも遺跡の調査は、まだまだ続きます。1つでも厚真町の魅力につながる情報を、歴史を、土の中から“発掘”して、“なぜ、どうして、そして、これからは”を大切に皆さんとともに、楽しく学び伝えていきたいと思います。